

特集

子どもと春

幼稚園の春

園庭は癒しの場

私たちは、幼稚園を地域の共育ちの場にするために園庭を開放しています。自然豊かな園庭に集うことが、人と交わる心地よさを味わう「ひととき」となって、子どもも大人も、そこに故郷を感じるようになっていっています。その前提として、園庭が「癒しの場」になっていることが重要です。私はその視点から、園庭で過ごす子ども・大人たちの姿をつづって、そこから課題を読み取り、この三十年間、園庭の環境づくりを活かすように努力してきました。理事長・園長、教職員、父母の有志、それぞれの個性で無理せず

安部 富士男



に持続する形で、心に残った情景を記録したり話し合ったりすることが大切と考えています。

春休みのある日のことです。午前十一時ごろ、園庭から聞こえてくる子どもの声に誘われて書齋を出ると、花びらが風に乗って空に舞っていました。

空に舞う花それぞれの韻をもち

二十組ほどの親子が仲間と連れ立って園庭に遊びに来ていました。満開の桜の下にゴザを敷き、親たちが手づくりの料理を分け合っていました。

私を見かけ、ゴザから出て両手でバランスを取り、素足で私に向かって歩いてくる乳児、その姿をほほ笑

んで見守る親。私は幸福感に満たされていきます。

芳子が目の前に降ってきた花びらをつまんで、ゴザから飛び出し、私に駆け寄って見せてくれました。

稚児ちごつまむ花に幽ゆずかに空の藍

ひとひらの花弁に映える空深し

「きれいだね」と芳子を抱きあげると、耳たぶにかすかに花の香りを感じました。

稚児抱くや耳みみ朶たに幽かに花薫かほる

弁当を食べ終わった子どもたちが花吹雪に誘われ、ゴザを跳び出し、かごめかごめを始めました。

風立つや花に身を寄せ稚児ら舞う

花舞うやかごめかごめの子ら包み

梅の根元では、この四月に年長組に進級する子どもたちの『家族ごっこ』が続いていました。

ままごとの母はサラダに花齋はし

稚児の掌ての齋はし包みて日ざし舞う

ままごとの菜花なばなご飯に地の香り

傍らのゴザの上で、二歳の弟が眠っていました。

ままごとに疲れ寝し子の掌てに齋

牧場から山羊の鳴き声が聞こえると、「餌をくれて鳴いている」と、清が牧場の丘に駆け上っていきました。三歳の空そらも、おぼつかない足取りで後を追っています。私も牧場に向かいました。

空は、牧場に駆け寄ると、清からもらった草を山羊にあげていました。私が近づくと「僕、餌、あげるの、上手でしょう」と胸を張っています。空は、園庭の片隅にある畑に駆けて行って齋はしを摘んで戻ってきました。山羊が草をおいしそうに食べると、最初緊張していた表情もくつろいできて、空の唇が山羊の口の動きに合わせかすかに動いています。清は柵を登って越

え、牧場に入つて餌をあげています。山羊も安心しきつた雰囲気です、山羊係でいつも世話してくれる清に身を寄せ、餌を食べています。

山羊愛し稚児に身を寄せ齋食む

Schoolの語源は「癒される居場所があつて、興味・関心・課題を論議するところ」。幼稚園も学校もその視点から園庭の環境を工夫することが大切です。

自然の四季に寄り添い、遊び・仕事のある生活を楽しんでいゝ子どもたちの姿に癒されて、私は幼稚園教育経営の危機を越えてきました。その背後に、時には「いざかい」しても幼稚園の教育方針を理解し、基本的には支え合つて生活している母親たちがいることを実感しています。

待つ力は見通す力と織りなして

春休みが終わつて入園式。式の翌日、喜びを全身に登園してきた孝は、母親が帰ろうとすると「お母さん

も一緒」と泣き始めました。それから毎日、門の前で大泣きし、担任を困らせていました。十日目、相変わらず泣いている孝の泣き顔もかわいいと感じて私が寄つて行くと、孝と目が合いました。

「園長先生におんぶする？」と声をかけると、孝はうなずきます。近寄つて背を向けると、背中に乗つてきました。私が両手を後ろに回してお尻を支えると、また「お母さんと一緒がいい」と泣き始めました。しばらくして突然泣き止みました。孝のおえつを背中に感じながら『どうしたのかな』と自問した時、孝が、「大変です。ここ、毛がありません」と私の頭頂部を指でつつきます。孝はいつも下から私を見ているので、私の髪はふさふさしています。ところが上から見ると頭頂部がはげていて驚き、一瞬泣き止みました。「園長先生は年寄りだからはげているの。孝君の大好きなお母さんのお土産、探そうか」と話すと、脇で孝と私のやりとりを見ていてほほ笑んでいた担任が、ポケットからビニール袋を出して孝に渡してくれました。

「森先生は優しい。お土産を入れる袋を孝君にくれた」と私が言うと、孝は目で同意していました。

雑木林の丘のスロープを上り尾根に出ると、山桜、染井吉野、大島桜、いろいろな桜の実が落ちていました。「お母さんのお土産、何にしようか」と孝を背から降ろすと、私は実を拾い始めました。「あっ！赤い実や青い実、黄色い実、きれいだ。」と独り言を言うと、孝もセッセと拾ってはビニール袋に入れ始めました。しばらくして「お母さん、迎えにくる」と私を見上げました。「お土産集めて、山羊さん、ウサギさんに草をあげて、お部屋に行くと、先生が紙芝居を読んでくれる。紙芝居の後、おやつを食べているとお迎えにくるよ」と応えました。孝は安心して、また、桜の実を拾い始めました。

年長児が「きれいな花咲いてるよ、来てごらん」と誘いに来ました。「僕もおいで」と孝の手をひいてくれます。春蘭が数輪、咲いていました。四月、年長児が新入園児に心配りしている姿に心とみます。

春蘭の花弁に鳥の影走る

孝が、左手に袋をしつかり持って右手で草を摘んで牧場に行くと、子山羊が柵に駆け寄ってきました。

東風吹くや子山羊を子らに吹き寄せて

孝は、山羊に餌をあげたり、紙芝居を読んでもらうことをイメージし、母親を待ちました。見通す力と待つ力は紡ぎ合って豊かになると考えています。

春ならではの発見と感動を

森を見回って草のトンネルを抜けると、畑の奥に菜の花が咲いていました。祐司と太郎が肩を並べて見つけていました。私に気づくと「ここを吹く風は黄色いよ」と感動しています。森を吹き抜けてくるさわやかな風に包まれて「風に色があるなんて知らなかった」と私は応えました。太郎が「よい匂いもする」とつぶやくと、祐司は菜の花から飛び立つ蜂を追って視線を

動かしています。「わかった。目に見えない蜂蜜が
いっぱい飛んでいるからよい匂いがするんだ」と私を
見上げました。祐司の母親は料理づくりが得意で、蜂
蜜たっぷりのケーキをいただいたことがあります。祐
司の家の台所には、蜂の絵のラベルを貼った瓶がある
のかもしれませんが。そんな生活を背景に「よい匂いも
する」と言う仲間の発見に触れて考えたのでしょうか。

私たちは、四季の美しさや変化を体で感じ、考える
生活を大切に行っています。感性と知性の発達は織りな
していることを子どもの言葉から学んでいます。

菜の花を播らせ舞いゆく風は黄色

自然を天然の保育室として

大正から昭和にかけて、子ども主体の保育・教育の
創造を目指し、実践に即した研究を通して日本の保育
の土台を築いた及川平治、倉橋惣三、橋詰良一らは、
異口同音に「大地を床、大空を天井、緑なす木立を壁

とした天然の保育室こそ最高の学びの場」と主張して
いました。私たちは、四季に寄り添い、自然の恵みを
生活に取り入れ、豊かな遊び、仕事のある保育の中
で、実体験を言葉などで表現することを大切に、感
性・感情・意欲の発達に知性の育ちをつなげようと努
力しています。

子山羊追うや子らに木の芽の天光る

子ら登る桑木芽吹きて空やさし

蝶追いゆく子らに優しき土手の空

(神奈川県横浜市 安部幼稚園 園長)

引用文献

*スタンダード英語語源辞典 大修館書店、School's Leisureの項

参考文献

安部富士男／著 『遊びと労働を生かす保育』 国土社、

一九八三年、第二章

安部富士男／著 『人との交わりを支えに生まれた幼児教育』

新読書社、二〇〇五年、第五章